

も同じ群からの流星を記入すれば、いつぱいになるし、輻射點決定の爲にはそれで充分である。

微光流星には多少とも光學器械即ち低倍率の望遠鏡が便利でないかと思つたので、幾らか其の實驗もした。ガリレオ双眼鏡は明るけれども視野の角度が狭くて流星には駄目である。大體 3 倍位の廣角接眼鏡をもつた特殊なファインダーと、相當した良い星圖 (Stucker の圖の程度) があれば便利だらうと思ふ。6月12日には自有のオットー製5センチ(8倍)のファインダーで輻射點を中心として出る可なり多數の流星を見る事が出来た。運動して居る物體であるから、望遠鏡の助けをかりても餘り明るく見えないので、極めて廣角度低倍率のものがよさそうである。

以上の記事は、今までの流星の観測者にとっては餘り突飛な事で、異論も澤山ある事と思ふが、將來澤山ありそうに見える微光流星群の観測方法について一つの案としておこう。

天體寫眞極限光度表

中村氏「寫眞望遠鏡の總目錄」(天界第111號)補遺

口径8センチ F5の寫眞レンズにより、晴夜天頂附近を H & D 400 の乾板により撮影し、良好なる像の得られたる場合、痕跡として現れる星像の極限光度の標準値。

露出時間		極限光度
分	秒	等
	1	6.5
	3.3	7.9
	10	9.1
	30	10.2
1	29	11.3
4	27	12.3
13	20	13.2
	40	14.1
	120	15.0
	360	15.8

左表の修正値

口径 3センチ	- 2.0等
” 5	- 0.8
” 10	+ 0.5
” 15	+ 1.1
” 20	+ 1.5
” 30	+ 2.1
” 60	+ 2.8
” 150	+ 4.0
F 10	- 1.0
反射鏡	+ 0.7
霧	- 1.0
快晴	+ 1.0
明瞭なる像	- 1.0